

純血華劇派 第14回ミュージカル公演

*I Can't Stop To Love You*

～聖夜の贖罪～

（  
聖夜の贖罪  
）

作・演出 春田鮎

『I Can't Stop To Love You』

純血華劇派 第14回公演ミュージカル

## 登場人物

沙羅・・・運命に翻弄されながらも強く明るく生きる女性

花恋・・・沙羅の親友 歌と友情に熱いミュージカル女優

マザー輝美・・・沙羅の過去を全て知るイノセント教会の修道女

イヴァナ・・・輝美を慕うイノセント教会の修道女

チャバツク・・・イヴァナの妹的存在のイノセント教会の修道女

ジョシユア・・・沙羅の息子 ハンデキャップを抱えながらも元気

ヴィンス・・・沙羅に思いを寄せる心の美しい大工の青年

ランド・・・牧場を営むヴィンスの親友 街の青年団のリーダー

朝子・・・パン屋を営むヴィンスの伯母 ヴィンスの姉的存在

音々(ねね)・・・ラジオ局を経営するやり手の女性

ストロベリー・・・バレエダンサーを夢見る少女 ジョシユアの友達

空琉(くーる)・・・飛行船の設計士を目指す少年 ジョシユアの友達

マドンナ・・・仕事を探してイノセントにたどり着いたショールガール

ホワイト・・・マドンナのマネージャー兼ヒモ

◆プロローグ

小さな田舎町“イノセント”の教会。  
クリスマスコンサートの練習に励む沙羅と街の人々。  
礼拝堂に美しい歌声が響いている。

M 『I Can't Stop To Love You』

沙羅「それじゃ、今日はここまで。次の練習までに今日言ったところをしっかりと復習してください。ストロベリー、高音がとっても良くなってきましたわ。その調子よ」

ストロベリー「はい、沙羅先生。ありがとう」

沙羅「それに比べて、音程が全然直ってない人がいます。次回もこの調子なら、ソロパートは無しにしますからね」

ランド「わっ！完全に俺の事言っていない？」

朝子「わかってるならきちんと練習してきなさいよ。男のくせしてだらしない」

イヴァナ「そうよ、ランドさん。年に一度の大事なクリスマスコンサートなんですからね。絶対に失敗は許しませんよ」

マザー「(笑) 大変ね、ランド」

ランド「マザー、笑っていないで、助けてよ」

空琉「僕、ソロパート歌えます！」

沙羅「まあ、本当？それじゃ、空琉に交代しちやいましょうか？ね、マザー？」

マザー「そうね、そうしましょうか」

ランド「待った、待った！分かりましたよ、次までにはきっちり練習してきます。だから、お願いします！ソロパート削らないで。婆ちゃんが見に来るって言うからさ、頑張りたいんだ。空琉、悪いな」

沙羅「そう。では頑張らないとね」

ランド「ああ」

朝子「お婆様、おいくつになったのかしら？」

ランド「この冬で92だ」

チャバツク「まあ、すごい。92年生きてきたら、世界はどんな風に見えるのかしら？」

マザー「何年生きたって・・・きつと、世界は美しいですよ」

ジョシュア「あ、母さん。雪だよ」

沙羅「本当だわ・・・」

窓を見上げる沙羅。響く教会の鐘。

#### ◆教会の食堂兼作務室

チャリティーバザーで売る小物を作っている街の女性たち。

M 『すべてを失っても』

チャバツク「いやーん、もう、全然うまくいかないわ。やんなっちゃう」  
沙羅「見せて。ほら、ここはこうやって、こうすれば。ね？」

イヴァナ「まったくチャバツクは短気なんだから」

チャバツク「しようがないじゃない、昔から不器用なんだから」

音々「お母様にお裁縫、教わらなかったの？」

チャバツク「私、捨て子なんです」

音々「そうか、ごめんね」

チャバツク「いいえ、全然」

イヴァナ「私も親はいたけど、子育て放棄されて教会に」

音々「へー、みんな大変なのね。今度うちのラジオでも特集組もうかな。子供の人權についてとか」

マザー「ぜひお願いします。どうして自分の子供を手にかけてたり、物のように扱ったりできるのか・・・」

音々「それに比べて沙羅は偉いわね。女手一つでジョシユアを育てて。しかもあんなに良い子に育ってるんだもの。たいしたものよ」

沙羅「いえ、私なんか・・・」

音々「それにしても楽しみだわ。クリスマスコンサート。うちの放送でも目玉なんだから頑張ってるね」

沙羅「はい、音々さん、頑張ります。ね？ストロベリー」

ストロベリー「うん！イヴァナ、チャバツク、明日も特訓よ！」

チャバツク「ひー、鬼コーチ！」

みんな「(笑)」

マザー「(笑) ほらほら、おしゃべりばかりで手がとまってるわ。クリスマスはもうすぐよ。頑張りましょう」

イヴァナ「はい」

朝子が来る。

朝子「ごめん、ごめん、遅くなりました。お詫びに、はい」

チャバック「わあ、朝子さんちのパン、大好き！」

朝子「売れ残りで悪いんだけど、お腹すいたでしょ？好きなどうぞ」

音々「ずいぶん気前いいわね？売れ残りとはいえ」

朝子「失礼な人ね。いやなら食べなくていいわよ」

音々「うそうそ、ありがたくいただきます。どれがいいかな」

朝子「どう、進んだ？あら、これ可愛い！今買っちゃダメかしら？」

沙羅「駄目ですよ、チャリティーバザーに出すんですから。始まる前に、商品がなくなっちゃいます」

朝子「そりやそうね。あ、そうだ。バザーにうちのパンも出していい？お店の材料を使い切らなくちゃいけないくて」

音々「あら、どうして？改装でもするの？」

朝子「・・・年内でね、しばらくお店お休みしようと思って」

マザー「え？」

沙羅「どうして？朝子さん」

チャバック「売上悪いの？」

イヴァナ「チャバック！」

チャバック「あ・・・」

音々「うちのラジオにも広告出してくれてるから、てつきり調子はいいんだと思っただけだ。何かあったの？」

朝子「ううん、売り上げは上々よ・・・」

音々「じゃあどうして？」

朝子「・・・この間病院の検査でね・・・再発・・・転移してた」

マザー「まあ・・・」

朝子「大丈夫よ。私は負けない」

音々「朝子さん・・・」

朝子「旦那がね、旅行しようって」

沙羅「旅行？」

朝子「ええ。もう何年も休みもなく働いてきたんだから、ここらで少し夫婦でゆっくりしたらどうだ？って、神さまが言ってるんだよって、そう言うの」

音々「・・・そっか」

イヴァナ「大丈夫。しっかり静養して、病気、直してください」

チャバック「私、毎日祈りますから。必ず、祈りますから」

マザー「いい旦那さんね」

朝子「ええ」

音々「・・・よし、それじゃあ、パン食べて、もういっちょがんばろうか」

イヴァナ「賛成。じゃあ、私これいただきます！」

チャバック「あ、ずるい、それ私が狙ってたのに！」

イヴァナ「へへん、早い者勝ち！」

チャバック「やだやだ、返して。じゃあ、半分！」

イヴァナ「べー！」

マザー「これこれ、主イエスが見てますよ」

イヴァナ・チャバック「あ……（十字を切り祈る）」

マザー「さ、いただきましよ。沙羅も」

沙羅「はい」

ランドとヴィンスがやってくる。

ランド「ハロー、ハロー、ご婦人方。ご機嫌いかがですか？」

イヴァナ「やだ、ランドさん。昼間から酔っぱらってるんですか？」

マザー「ランド、不謹慎よ。ここは教会です。酔いを醒ましてからいらっしやい」

ランド「すみません、マザー、でも俺、嬉しくって」

チャバック「何がですか？」

ランド「パンパカパーン！ほら、ヴィンス、早く言っちゃえ」

朝子「早く言っちゃえて何よ？」

音々「ヴィンス？何を言うの？」

ヴィンス「え？ああ、いや……その……」

マザー「ランド？ヴィンス？話があるなら早く言いなさい。チャリティーバザーに出す小物をみんなで作ってるの。邪魔しないでちょうだい」

ランド「まあ、そういうなよ、マザー。昨日降った雪のせいで、俺もヴィンスも今日は仕事が休みでさ。一緒に昼飯食ったら、こいつが突然すごい話するもんだから、俺嬉しくって、思わず乾杯しちゃったのよ、一杯だけ、あ、俺は3杯か。そんなことはいいんだよ、だから」

マザー「だから何なの？ヴィンスが何を言ったというのよ？」

ランド「ほら、ヴィンス、今だ。沙羅！こっちこっち！」

沙羅「え？私？……（おずおずと前が出る）どうしたの？ヴィンス」

ヴィンス「うっ！……あの、その……」

朝子「ちよつとまさか」

音々「うん、あれだ」

チャバック「あれ？あれってなに？」

イヴァナ「馬鹿ね、黙ってなさい」

チャバック「……………」

ヴィンス「沙羅……」

沙羅「はい……?」

ヴィンス「俺と……」

沙羅「……………」

ヴィンス「俺と付き合ってください!」

朝子「言った」

音々「わお」

朝子「こら、ヴィンス!あんたは突然何を」

マザー「えー!?!」

イヴァナ「マザー!?!」

ランド「おいおい、マザー!」

倒れるマザーをあわてて助け起こすみんな。

大騒ぎの教会。

朝子と音々も帰り、静かになった教会。

残った沙羅とランド。落ち着いた様子のマザー。

ランド「びっくりしたぜ、マザー」

マザー「ごめんなさいね。驚いちゃって」

ランド「でもなんでマザーが倒れるのさ。マザーが告白されたわけじゃないのに」

マザー「それはそうんだけど……おかしいわね」

ランド「ま、でも、あいつの気持ちは真剣だからさ。わかってやってくれよ、沙羅」

沙羅「……………」

ヴィンスが入ってくる。

ランド「おう」

マザー「悪いわね、馬小屋の手伝いなんかさせて」

ヴィンス「いえ、好きだから」

沙羅「え?」

ヴィンス「いや、馬が……」

沙羅「クスッ・・・うふふふ」

ヴィンス「何がおかしいんだい・・・？」

沙羅「ごめんなさい」

ヴィンス「いや、別に・・・いいんだ」

ランド「・・・もう、しつかりしろよ。なあ、沙羅、こいつはさ、正直だけが取り柄のしがない大工だけどさ、沙羅の事を真剣に考えてるんだ。だからさ、な、OKしてやってくれ。頼む、この通りだ」

マザー「ランド、ちよっとお待ちなさい」

ランドに目配せをするマザー。

ヴィンス「・・・沙羅」

沙羅「はい」

ヴィンス「突然でびっくりさせちゃってすまない。だけど君への気持ちは本気だ。君がこの街に来た時から、ずっと好きだった。もちろんジョシユアの事も好きだ。ちゃんと面倒みていく。約束する。だから、俺と結婚してください」

ランド「おい、いきなり結婚まで行くか？まあ、いいけど。どうだ、沙羅？OKだよな？」

マザー「ランド！」

沙羅「・・・ヴィンス、気持ちは嬉しいわ。本当に・・・だけど、ジョシユアは普通の子より成長が遅いし、癲癇の持病もあって、いつ発作に襲われるか分からない。きつと、あなたが思ってるより、大変だと思う。だから、あなたの気持ちは嬉しいけど、私は、あの子以外のことに気を取られたくないし・・・許されないと思うの」

ランド「許されないって・・・ジョシユアの事は分かるけど、君には君の人生が」

ヴィンス「ランド！・・・ちよっと、黙っててくれ」

ランド「あ、ごめん・・・」

ヴィンス「・・・わかった、沙羅、君とジョシユアの気持ちも考えないで、いきなりこんな話をして本当にすまなかった。だけど、俺・・・待っててもいいかな」

沙羅「ヴィンス・・・」

ヴィンス「俺、今まで生きてきて、こんな気持ちになったことなくて、誰かを守りたいなんて思ったことなくて・・・だから、沙羅とジョシユアに何かあったら、どんなことしても助けたい。だから、もし、俺が必要だったら・・・沙羅がそんな気持ちになる事があったら・・・その時まで待っててもいいかな」

沙羅「……………ありがとう、ヴェインス……………わかったわ」

### ◆沙羅の家

チェスやカードをして遊ぶ、ジョシユアと空琉とストロベリー。

空琉「うわーん、また負けた！」

ストロベリー「これで通算18勝0敗。ジョシユアの勝ち」

空琉「ちきしょう、もう一回！もう一回やるぞ」

ジョシユア「もういいよ、別の事しようよ」

ストロベリー「賛成」

空琉「なんだよ、ストロベリー。男の気持ちってもんがわかってないな」

ストロベリー「わかるわけじゃないじゃない、女の子だもん」

ジョシユア「あはははは」

空琉「何がおかしいんだ？ジョシユア！」

ジョシユア「だって、チェスに負けたからって、どうしてそんなに悔しいの？」

空琉「俺は負けるのが大っ嫌いなもの！」

ジョシユア「どうして？」

空琉「どうしても！お前だって、どうしても嫌いな事ってあるだろ？」

ジョシユア「どうしても嫌いな事？」

空琉「そうだよ、頭じゃわかってるけど、心がついて行かないみたいな、なあ？」

ストロベリー「私はね、出かける前に髪型が決まらないと許せないわ」

空琉「だからいつも待ち合わせに遅刻して来るんだな」

ストロベリー「しょうがないじゃない、女の子なんだもん」

空琉「出た！それを言えば全部許されるのかって言うの！？で、お前は？」

ジョシユア

ジョシユア「僕は、母さんをいじめる奴」

空琉「いるのか？そんな奴」

ジョシユア「ううん、いないよ。この街の人はみんな優しいから」

ストロベリー「じゃあ、よかったね」

ジョシユア「うん。よかった」

三人「(笑)」

ジョシユア「それじゃあ、次はストロベリーのしたいことしようよ」

空琉「えー！」

ストロベリー「うるさい。ありがとう、ジョシユア。それじゃあね、王女

様ごっこ！」

空琉「王女様ごっこ!？」

ジョシユア「どうやるんだい？」

ストロベリー「私はね、プロのバレリーナになりたいの。バレリーナになって、シンデレラをやりたい。舞踏会のシーンで、たくさんの貴族たちに囲まれながら、思いつき踊るの！あなたたちは男性貴族の役ね。わたしにダンスを申し込むのよ。いい？」

空琉「え！俺ダンスなんて」

ストロベリー「大丈夫！私に任せて」

M 『Girls, Be Beautiful』

愉快そうに笑う三人。

そこに花恋が現れる。

空琉「・・・おい」

ジョシユア「ん、何？」

空琉「あれ」

ジョシユア「え？あれって?・・・あ・・・あの、どちら様ですか？」

花恋「沙羅はいる？」

ジョシユア「沙羅？母さんは出かけてます。何か御用ですか？」

花恋「あなた、もしかしてジョシユア？」

ジョシユア「はい、え？どうして僕の名前を」

花恋「まあ、本当にジョシユアなのね！こんなに大きくなって（抱きしめる）」

ジョシユア「わ！なんですか、どうしたの？空琉、助けて！ストロベリー！」

空琉「あの、ジョシユアを離してあげて。こいつ、そういうの苦手なんだ」

ジョシユア「やめて、やめてよ・・・」

花恋「え？どうしたの？大丈夫？」

ジョシユア「・・・ああ」

ストロベリー「ジョシユアは癩癩があるから、あまり急に驚かせたりしちゃいけないのよ。しっかり、ジョシユア。もう大丈夫よ」

ジョシユア「うう・・・」

花恋「どうしよう、そんなつもりじゃなかったんだけど。ごめんねジョシユア」

そこにヴェインスと沙羅が、笑いながら帰ってくる。

沙羅「どうしたの？ ジョシユア、大丈夫？」

ヴェインス「おい、どうしたんだ！？ いけない、医者に連れて行こう！ 馬車を用意する！」

沙羅「ヴェインス、大丈夫よ。落ち着いて」

ヴェインス「でも……」

沙羅「大丈夫。もうおさまったみたいだから。いい子ね、ジョシユア、もう大丈夫よ。母さんはここにいるわ。大丈夫」

ジョシユア「母さん、ごめん……僕、びっくりしちゃって」

沙羅「そう。ほら、母さんの手を握って」

ジョシユア「うん……もう大丈夫」

沙羅「良かった。ありがとう、空琉、ストロベリー。あなたたちがいてくれて助かったわ」

空琉「ううん」

ストロベリー「沙羅先生、あの人がいきなりジョシユアを抱きしめたから、ジョシユア、びっくりしちゃって」

沙羅「……花恋」

花恋「……沙羅」

沙羅「花恋！（抱きつく）」

花恋「ごめんなさい、沙羅。私、ジョシユアってわかったら嬉しくて、つい抱きしめちゃったの。許して」

沙羅「……花恋……会いたかった」

花恋「沙羅……」

突然、フルートを吹き始めるジョシユア。

再会に笑顔があふれる沙羅と花恋。

おどけた空琉とストロベリーは踊り出し、ヴェインスも巻き込まれ笑い合うみんな。

### ◆沙羅の家

朝。部屋の掃除をする沙羅。

起きてくる花恋。

花恋「おはよう」

沙羅「おはよう。眠れた？」

花恋「ええ、ぐっすり。二度と目覚めたくないくらい」

沙羅「クスッ、花恋たら。コーヒー飲むでしょ？」

花恋「うん、欲しいな。ありがと」

ジョシユアも起きてくる。

ジョシユア「おはよう、母さん。あ、それから、えーと」

花恋「花恋よ。おはよう、ジョシユア。昨日は本当にごめんなさい」

ジョシユア「ううん、僕の方こそ驚かせてごめんなさい。花恋おばさん」

花恋「花恋でいいわ。おばさんはいらない」

ジョシユア「あ、そうだね？じゃあ、花恋」

花恋「なあに？ジョシユア」

ジョシユア「ようこそ、イノセントへ」

花恋「……ありがとう。昨日のフルートも素敵だった。またいつか吹いてくれる？」

ジョシユア「いいよ、また吹くよ。母さん、僕、ランドさんの牧場に行ってくる。空琉が新しい模型飛行機のテストするんだって」

花恋「模型飛行機？」

ジョシユア「うん、空琉は飛行機を作る人になるんだって。行ってきます」

花恋「いってらっしゃい」

沙羅「気を付けてね。練習の時間を忘れちゃ駄目よ」

ジョシユア「はい」

出ていくジョシユア。

花恋「いい子ね。あんたほんとにすごいわ」

沙羅「私はすごくないわよ。あの子がいてくれるから、生きていけるの」

花恋「……玲子さんと同じこと言うのね」

沙羅「ママは……ママは私のせいで苦しんだ。亡くなるその日まで」

花恋「沙羅のせいじゃないわよ。たぶん、運命が、残酷すぎただけ」

沙羅「……だけどよくここが分かったわね。しばらく泊まって行ってね。いっぱい話そう。昔みたいに」

花恋「うん……」

沙羅「……花恋？」

花恋「……ずいぶん探した」

沙羅「……ごめん」

花恋「10年ぶりに故郷に帰ってみたら、知ってる人はもうほとんどなくて、街の景色もずいぶん様変わりしてたわ。あなたの家も無くなってる、もう二度と会えないのかと思ったら、一晩中、教会の礼拝堂で泣いてたの」

沙羅「花恋……」

花恋「そうしたらね、修道女の方がいらして事情を聞いてくれたの。その人が教えてくれたのよ。マザーがイノセントという街の教会に転任されたって。マザーなら沙羅の居所を知っているかもしれないって思って、駄目でもいいから行ってみようって」

沙羅「マザーには？」

花恋「まだよ。でも聞いて、面白いのよ。この街に着いてすぐ、ちよっと寄ってみたパン屋さんでラジオが流れてたの。そしたらね、クリスマスメインイベントは教会で行われる“沙羅音楽教室”によるクリスマスコンサートです！お楽しみにって言ってるわけ」

沙羅「朝子さんの店ね」

花恋「あんた昔から歌が好きだったし、本当は私なんかよりずっと上手かったからピンと来たの！それで店の人に聞いたの。この街に沙羅って女性がいますかって。そしたらビンゴ！ここを教えてくれたのでした」

沙羅「そんなことがあったんだ。朝子さんにお礼言わなきゃ」

花恋「すごいでしょ？」

沙羅「すごい」

花恋「……あんなことがあって、傷ついてボロボロだった沙羅を放ったまま、私は自分の夢をかなえるためにニューヘイブンに旅立った。だから、1年後に沙羅から手紙が来た時は嬉しかった。沙羅は私を怒ってない、応援してくれてるって。本当に嬉しかった。それに子供を産んで、幸せそうに笑ってる写真を見た時、心底ほっとした。見て（写真を取りだす）」

沙羅「それ……」

花恋「手紙と一緒に届いたこの写真が、私のお守り。一人じゃない。そう思って頑張ってきたのよ……頑張って、頑張って……」

沙羅「……花恋……私も、ジョシユアが生まれて、あの町で頑張ってたんだけど、やっぱいろいろ言われたり、ジョシユアはああいいう子でしょ？からかわれたり、いじめられることもあったりして……そんな中ある日、ママは命を絶ってしまった。私ももう限界で、ジョシユアを道連れにこのまま……そう思いつめてた時、マザーがこの街の教会に移ることになったの。マザーは一緒に来ないかって言ってくれた。私たちは誰にも告げず、逃げるようにしてこの街に来たわ。色々あったけど、今はマザーのすすめで歌を教える教室をやっているの。ジョシユアを育てていくために」

花恋「そうだったのね……だけど、今は？幸せ？」

沙羅「ええ。幸せよ。教室を始めて良かった。支えられてる。歌にも、街の人にも」

花恋「そうか・・・それで、昨日の男性は誰なの？もしかして？」

沙羅「あ・・・そんなじゃないわよ」

花恋「あやしいわねー？」

そこにヴィンスが現れる。

ヴィンス「おはよう、沙羅。あ、おはようございます・・・花恋さん」

花恋「おはようございます。突然現れて、騒ぎ起こしちゃって、すみませんでした」

ヴィンス「いえ、僕に謝ることなんて、ぜんぜん・・・それより、どうですか？この街は。何もないでしょう？本当に恥ずかしいや、せっかく沙羅の友達が来てくれたのに、自慢できるものが何にもないなんて・・・」

花恋「来たばかりだから分かりませんが、いい人が多いように思いますよ。あなたといい、昨日のパン屋さんといい」

ヴィンス「パン屋？あー、もしかして朝子おばさん？どうして知ってるんですか？あの人、僕の義理の伯母なんですよ。年はあんまり変わらないんですが、昔から頭が上がりなくて。ヤダなー、あの人が街の代表に思われたら、なんだか困っちゃうな。あははは」

花恋「あはははは、面白い人！コメディアンですか？」

ヴィンス「まさか！僕はただの大工です。家作ったり、橋を架けたり」

花恋「へー、素敵ね」

ヴィンス「素敵だなんて、そんな・・・花恋さんは？何かお仕事を？」

花恋「私？私はね・・・」

沙羅「花恋は女優なの。ブロンズウェイミュージカルで歌って踊るのが仕事よ。すごいでしょ？」

花恋「あ、沙羅」

ヴィンス「へー、すごいんだなあ！ブロンズウェイっていえば、最高峰のステージですよね？」

花恋「それはそうだけど」

沙羅「そうだわ！いいこと思いついた！花恋にゲストとして、クリスマスコンサートに出てもらいましょうよ！本物のスターがゲストだなんてことになったら、今年のコンサートは盛り上がる事請け合いね！」

ヴィンス「それはいい！グッドアイデアだよ、沙羅！あー、こうしちゃいられない！みんなに知らせて、ポスターなんか作り直さなきゃ」

沙羅「ねえ、花恋、いいでしょ？お願い！一緒に歌いましょうよ！この通り！」

花恋「え！？別にかまわないけど・・・」  
沙羅「良かった！きつとみんな喜ぶわ！」

花恋「そう、それは良かった・・・」  
ヴィンス「さあ、忙しくなるぞー」

沙羅「ありがとう、花恋！」

花恋「ええ・・・」

#### ◆教会

クリスマスコンサートメンバーが集まっている。  
準備をしているマザーたちと、発声練習をする朝子と音々。  
遅れて沙羅とヴィンスが花恋を連れて来る。

沙羅「遅くなってごめんなさい」

マザー「大丈夫よ。それより沙羅・・・花恋!？」

花恋「・・・マザー・・・お久しぶりです」

駆け寄り、花恋を抱きしめるマザー。

花恋「マザー・・・」

マザー「ああ、花恋・・・またこうして会える日が来るなんて・・・良かった・・・元気なのよね？良く顔を見せて・・・ああ、本当に花恋だわ」

沙羅「昨日突然訪ねてきたの。もうビックリして」

マザー「そう、でも良くここが分かったわね」

花恋「教会がマザーの転任先を教えてください・・・玲子おばさんの事、聞いたわ」

マザー「あんなことになってしまっ・・・私をもっとそばにいてあげれば」

花恋「マザーのせいじゃない。自分を責めないで」

マザー「ありがとう・・・昨日、沙羅を訪ねてきた女性がいたって朝子が教えてくれたんだけど、いったい誰だろうと思っていたのよ。まさかあなただったなんて」

花恋「驚かせてごめんなさい」

沙羅「みなさん、紹介します。私の幼なじみの花恋です」

花恋「こんにちは。お邪魔します」

朝子「沙羅に会えたのね。良かった」

花恋「あ、パン屋の。昨日はありがとう」

ヴィンス「さっき話した僕のおばさん。ね？朝子おばさん」  
朝子「その呼び方はやめてっついても言ってるでしょ!？」  
ヴィンス「あははは、ごめんごめん」  
イヴァナ「イヴァナです。こっちはチャバック。始めまして、イノセントへようこそ」  
チャバック「どうですか？この街は」  
花恋「ええ、静かで素敵なところね」  
チャバック「静かすぎるのがたまに傷なんですけどね」  
イヴァナ「それは言わないの!」  
みんな「(笑)」  
マザー「ニューヘイブンからはいっ？仕事の方はいいの？」  
花恋「ええ・・・休暇をもらったの」  
マザー「そう。なら、しばらくゆっくりできるんでしょ？」  
花恋「ええ。少しの間、沙羅のところにお世話になろうと思って」  
マザー「うんうん、良かった。やはりあなたたちは本当の、一番の友達ね」  
花恋「もちろんよ、マザー。ね？沙羅」  
沙羅「決まってるじゃない」

## M 『一番の友達』

音々「素敵な歌声だわ。ぜひ私のラジオ局に来て歌ってもらいたいわ」

沙羅「さすが音々さん、お目が高い。花恋はね、ニューヘイブンのブロンズウェイミュージカルのステージで活躍するミュージカル女優なんです!」

花恋「沙羅・・・」

沙羅「照れない照れない。そして、みなさんに重大な発表があります!」

朝子「なにになに?」

沙羅「花恋が私たちと一緒に、クリスマスコンサートに出演してくれることになりました!」

音々「えー!?本当!?すてきー!」

イヴァナ「本当ですか?」

チャバック「いいの?でもギャラは出ませんよ?」

朝子「チャバック!ひとこと多い!」

チャバック「あ、またやっちゃった・・・」

花恋「いらないわよ、そんなもの」

音々「だけどこんな素晴らしいゲストに参加してもらえるなんて、神の思

し召しね」

沙羅「そうね、きつとそうね」

マザー「いいの、花恋？無理なお願ひしてるんじゃない？」

花恋「全然。こうしてまた沙羅やマザーと一緒に歌えるなんて、夢のようよ。沙羅、ありがとう」

沙羅「私の方こそ、ありがとう、花恋」

ガヤガヤとランドと子供たちが入ってくる。

ランド「だから空琉、わかるように説明しろ。どうしてあんなでっかいものが宙に浮くんだけ？俺はわけがわかんねえ」

空琉「だからよく聞いて！この翼の上と下の空気の流れの差によって揚力が発生して」

ランド「揚力？なんだそりや？体力なら自信あるんだけどな」

空琉「あーもう！だからー！」

沙羅「はいはい、それくらいにして、いったいどうしたの？」

ストロベリー「もうずっとこの調子なの。頭のいい子供と、やんちゃな大人を一緒にしちゃいけないって事は良く分かったわ」

マザー「まあ、それは大発見ね、ストロベリー」

ストロベリー「まあね」

朝子「ジョシユアは楽しかった？」

ジョシユア「うん、楽しかったよ。テスト飛行は失敗だったけどね」

空琉「ちくしょう！次こそは絶対に牧場の端から端まで飛ばしてやる！」

ランド「いいぜ、いつだって牧場は貸してやる」

空琉「サンキュー、ランドさん」

ランド「お、彼女が噂のべっぴんさんかい？ジョシユア」

ジョシユア「うん、そうだよ。花恋は母さんの友達さ」

ランド「ようこそ、花恋。俺はランド。牧場をやってる。たまに飛行機の試験場だけだな」

花恋「(笑) よろしく(握手をする)」

空琉「あ！握手した！」

ランド「いいだろ、別に。大人の挨拶だ。これで俺と花恋は仲間さ」

空琉「え！いいな、僕もしたい！」

ストロベリー「あたしも！」

ジョシユア「僕も！」

ランド「わははは、好きにしな！」

## ◆教会

祈りを捧げているマザー。

マザー「主よ、どうかあの子たちをお守りください・・・生涯の友と誓った玲子が、自らの手で命を絶った時、私も本当はすぐにも死ぬつもりでした・・・聖職者である私が、主の教えに背き自殺することは、主のおそばに行くことが出来ない、神を冒瀆する行いなのは良く分かっています・・・でも私はもう生きていけない・・・私は人を殺めてしまった・・・その苦しみから逃れたい・・・その一心でした・・・だけど、まだこうして命を長らえているのは・・・沙羅、ジョシユア、そして花恋・・・あの子たちを守ることが出来るなら、どんな罰でも引き受けます。どうか、主よ・・・どうか・・・」

## M 『祈りの力』

見知らぬ女と男が礼拝堂に入ってくる。

マザー「・・・こんにちは・・・」

マドンナ「ふーん、古い教会ね」

ホワイト「ま、別にいいじゃないか。神など信じちゃいないんだろ？」

マザー「・・・何かご用かしら？旅の途中ならお茶でもどう？食堂にご案内しましょう」

ホワイト「酒はありませんかね？」

マザー「・・・お酒は無いわね。ここは教会だから」

マドンナ「じゃあ酒場教えてよ。あと安い宿も」

マザー「それはかまわないけど・・・あなたたち、どこからいらしたの？」

マドンナ「うっせーんだよ、ババア！聞かれたことにだけ答えな」

ホワイト「クククツ、ねえ、シスター？」

マザー「・・・何？」

ホワイティ「神様っているんですかね？」

マザー「・・・」

大笑いする男と女。

そこにランドが現れる。

ランド「マザー、ミルク持ってきたよ、あれ？お客さん？」  
マドンナ「あ、お兄さん、グッドタイミング！この辺でお酒飲める店と、安い宿知らない？」  
ランド「酒場に安宿？なんだよ、お前ら、金欠の新婚旅行か？」  
ホワイト「ま、そんなところです」  
マドンナ「ね？いいとこ教えてよ」  
ランド「ああ、かまわねえけど・・・マザー？」  
マザー「・・・教えてあげて」  
ランド「ああ・・・じゃ、行こうぜ、こっちだ」  
マドンナ「じゃあね」  
ホワイト「また来ます」  
マザー「・・・」

#### ◆教会

練習に集まった沙羅たち。

沙羅「それじゃ、始めましょうか？今日から花恋も一緒に練習してくれることになりました。拍手！」  
花恋「よろしくお願いします。一緒に素晴らしいクリスマスコンサートにしましょう」

ヴィンス「イエーイ！（拍手）」

一同「（拍手）」

朝子「沙羅」

沙羅「はい、なんですか？朝子さん」

朝子「見違えたみたい」

沙羅「え？」

音々「沙羅がこんなに明るい人だとは知らなかったわ。友情ってすごいわね」

朝子「本当。うらやましい」

沙羅「そんな・・・でも、本当に嬉しいんです」

音々「良かった。ね？」

朝子「うん、良かった」

音々「ところで、ランドはまだ？」

ヴィンス「連絡はないけど、そのうち来るんじゃないですか？」

イヴァナ「いてもたいてして戦力にはなりませんからね（笑）」

音々「ひどい事言うわね（笑）、まあ当たってるけど」

一同「(笑)」

朝子「マザーもいないわね？おでかけ？」

チャバック「マザーは少し具合が悪いみたいで、奥の部屋で休んでいます。良くなったら来るそうなので、始めててくださいって」

沙羅「そう」

ヴィンス「このところクリスマスの準備で忙しかったから、疲れが出たのかな」

ストロベリー「じゃあ私がマザーの分まで頑張るわ」

沙羅「まあすごい。じゃあ、ストロベリー、お願いするわね」

ジョシユア「母さん、僕も頑張るよ！」

沙羅「お願いよ、ジョシユア」

ヴィンス「おや？空琉は宣言しないのかい？」

空琉「ああ。だってランドと一緒に、だれも僕にはそんなに期待してないだろ？」

沙羅「そんなことはないわ、空琉」

空琉「だって」

沙羅「いいこと？空琉。このクリスマスコンサートメンバー、誰一人いなくてもいいメンバーなんていないのよ」

空琉「でもさっきみんなで」

イヴァナ「ごめん、空琉。冗談が過ぎたわね。ランドさんがいなくていいなんて、誰も思ってたやしないわ。もちろん、空琉も」

音々「そうよ、空琉。誰も本気で言ってたやしないんだから。信じて」

空琉「そうなの？」

ヴィンス「そうだよ、空琉。俺たちはそうだな、馬車の部品みたいなものさ。車輪だったり、荷台だったり、手綱や鞭、御者台にそれから馬！何ひとつかけたって馬車は動かない。みんなで力を合わせて前へ進むんだ」

空琉「へー、じゃあ僕、御者台がいい！だってカッコいいもん！」

ジョシユア「僕は鞭は嫌だな。だって馬がかわいそうなもの」

ストロベリー「馬鹿ね、例えばよ、例えば」

一同「(笑)」

沙羅「それでは、始めましょう」

## M 『JOY TO THE WORLD』

歌い終わり、互いに確認し合うメンバーたち。

花恋「私、ちょっとマザーの様子を見て来るわね」

沙羅「うん」

イヴァナ「あ、それなら私が」

沙羅「いいのよ、イヴァナ、ありがとう」

マザーの部屋へ向かう花恋。

そこにランドが昨日の二人を連れて入ってくる。

ランド「いやあ、悪い悪い、遅くなっちゃった」

朝子「まったく、どこほつき歩いてたのよ？」

ヴェンス「牧場の仕事かい？手が足りないなら」

音々「あら？あんた酒臭い！」

ヴェンス「おい、ランド」

ランド「いや、それがさ、昨日ここで会った二人と飲み始めたら話が合っちゃってさ、貧乏旅行の途中で行くところ無いつて言うから家に泊めたんだ。そしたら朝まで盛り上がっちゃって……なに？……あ、ごめん、練習はしてきましたよ、ソロパート……」

沙羅「ランド……」

マザー「帰りなさい」

奥から出てきたマザー。

ホワイト「こんにちはは、マザー。また来ました」

マザー「ここは教会です。今はみんなでクリスマスコンサートの練習をしてるんです。面白半分に邪魔をしないでちょうだい」

ランド「マザー、俺は別に」

マザー「ランド！……あなたも帰りなさい。酔って教会に来るなど言うたはずよ。今度同じことをしたら」

ランド「わかった、わかった、悪かったよ、マザー……でも、昨日、マザーが困ってる様子だったから俺は二人を……」

マザー「そうね。ありがとう。だけど、私にはこの二人がまともな人間には思えないわね」

ホワイト「ずいぶんひどい言われ様だな。なあ？マドンナ」

マドンナ「フツ、火つけるわよ」

沙羅「なんてことを！？」

音々「あんたたちどこから来たの!？」

朝子「旅行の途中ならさっさとこの街から出て行って! いますぐ、このイノセントからね!」

ホワイト「どこにどんだけいようと俺たちの勝手でしょ? あんたらの指図は受けませんよ」

マドンナ「私この街、気に行っちゃった。住み着いちゃおうよ」

ホワイト「いいぜ、お前がそういうなら」

花恋「マザー、ここにいたの? トイレから戻ったらベッドにいないからビツクリして・・・(はっ!と顔をそむける)」

ホワイト「おや?・・・お嬢さん、もしかして(回り込み顔を確認しようとする)・・・やっぱりだ! パピヨン! こんな所で何してるんだ? 久しぶりだな、元気だったか?」

マドンナ「誰なの?」

パピヨン「お前の先輩だよ。なあ、パピヨン、夜な夜な男たちを虜にしたもんだよなあ?」

沙羅「花恋?」

花恋「・・・人違いよ。私はパピヨンなんて名前じゃない」

ホワイト「おいおい、ひどいじゃないか、俺とおまえの仲だろ? これでも人違いだって?」

花恋の腕の蝶の入れ墨を確認するホワイト。隠す花恋。

花恋「さわらないで!・・・私にさわらないで」

飛び出していく花恋。

#### ◆馬小屋

一人、物思いにふける花恋。写真や手紙を見返している。

#### M 『長い長い夢』

イライラし始める花恋。

カバンの中をあさり、何かを探している。

そこに突然、ヴィンスが現れ驚く花恋。

ヴィンス「ここにいたのか? いきなり飛び出していくから驚いたよ。大丈夫かい?」

花恋「・・・ええ・・・沙羅は？」

ヴィンス「うん、マザーと礼拝堂に・・・あの二人は帰ったよ。ランドや他のみんなも」

花恋「・・・ごめんなさい」

ヴィンス「いや・・・知り合いなのかい？」

花恋「・・・いいえ・・・人違いよ・・・あの男がいきなり腕をつかむものだから、驚いただけ」

ヴィンス「なんだか嫌な感じだよね、あいつら」

身震いをし腕をさすり、苦しそうな様子の花恋。

ヴィンス「どうしたの？どこか痛むのかい？マザーたちを呼んでこようか？」

花恋「やめて・・・行かないで」

ヴィンス「でも・・・呼んでくる！ここで待ってて！」

花恋「行かないで！・・・お願い、ここにいて・・・」

ヴィンスに抱きつく花恋。

ヴィンス「花恋？・・・どうしたんだい？」

花恋「・・・嘘よ・・・知ってる」

ヴィンス「知ってる？知ってるって何をだい？」

花恋「あの男のことよ。私はあの男を知ってる・・・」

ヴィンス「・・・本当かい？」

更に苦しそうな花恋。

花恋「ヴィンス・・・過去って、どうやったら消せるの？」

ヴィンス「花恋？・・・」

花恋「ふっ・・・私ね、本当は少し前まで、薄汚いショーガールだったのよ」

ヴィンス「え？でも、ニューヘイブンで成功したって・・・ブロンズウエイミュージカルのステージで踊って歌って、観客の前で脚光を浴びてるって」

花恋「嘘よ・・・」

ヴィンス「・・・嘘？・・・どうしてそんな嘘？」

花恋「悔しいじゃない・・・」

ヴィンス「なにが？誰に対して悔しいなんて言うんだよ？」

花恋「沙羅よ！沙羅に決まってるじゃない・・・」

ヴィンス「沙羅？・・・だって君たちは親友じゃないか！？それがどうして悔しいだなんて」

花恋「私だけ不幸になるなんて嫌だったのよ！不公平じゃない、どうして私だけ・・・」

ヴィンス「そんな・・・じゃあどうして会いに来たんだよ！？嫌なら会わなければ良かったじゃないか!？」

花恋「会いたかったの！・・・沙羅に会って、慰めて欲しかったの！・・・なのに・・・」

ヴィンス「花恋・・・」

更におかしな様子の花恋。

花恋「過去は消えないって言ったでしょ？」

ヴィンス「それがどうしたんだい？」

花恋「・・・ジョシユアって、誰の子供か沙羅から聞いている？」

ヴィンス「いいや、聞いてないけど」

花恋「ふっ・・・あの子はね、沙羅と沙羅の実の兄との間に生まれた子よ！呪われてるのよ、生まれてきてはいけなかった子供なのよ！」

ヴィンス「なんだって!?!?!」

花恋「それから知っていて？その実の兄の名前が・・・ジョシユアなのよ」

ヴィンス「嘘だ・・・そんなこと、そんなこと嘘だ！」

花恋「忘れられないのよ、沙羅は。今でもずっとジョシユアを愛してる・・・あなたがどんなに沙羅を愛してもね・・・ははは・・・あはははは・・・」

ヴィンス「やめろ・・・やめてくれー！」

花恋「あははは・・・はっ!?!私は何を・・・いやー！私、今なに言ったの!?!ヴィンス、私、私・・・嘘よ、ヴィンス、今の話は全部嘘！信じないで！お願い！沙羅を、沙羅を守ってあげて！ヴィンス・・・お願いよ・・・ヴィンス・・・」

ヴィンス「・・・うあー！」

花恋「ヴィンス!・・・(泣)」

走り去るヴィンス。

薬と注射器を取りだし、泣きながら震える手で麻薬をうつ花恋。

## ◆酒場

酒場で酒に溺れているヴィンス。  
そこにホワイトたちが現れる。

ホワイト「おや？先程は失礼しました。だいぶ酔われているようですね」  
ヴィンス「うるさい、あっちへ行ってくれ。俺のことはほっといてくれ」  
マドンナ「いいじゃない、一緒に飲みましょ？」

ヴィンス「あっちへ行け・・・あっちへ・・・」

ホワイト「どうされたんですか？さつきまではマジメそうで爽やかな青年だと思っていたのに、たいそう酒癖が悪い」

ヴィンス「酒は初めてだ・・・うえ」

マドンナ「やだ、あっち行ってやってよ」

ホワイト「何か悩み事でもおありですか？」

ヴィンス「悩み？・・・お前らせいだ、お前らの・・・」

ホワイト「俺たちは別に何も。どうですか？気持ちを楽にしたくはありませんか？」

ヴィンス「何だと？」

ホワイト「人生に悩みはつきません。そこで、とてもいい薬を紹介できるんですがね」

ヴィンス「いい薬？」

ホワイト「ええ。人生の苦しみから全て解放してくれる、神の薬です」

## M 『シアワセのシワヨセ』

酩酊して椅子に座るヴィンス。

ホワイト「準備はいいですか？」

ヴィンス「何するんだ？やめろ・・・」

ホワイト「大丈夫、心配はいりません。俺たちに任せといてください」

マドンナ「行くわよ。Go To Heaven」

ヴィンスの腕に注射針を刺すマドンナ。

ヴィンス「あ・・・ああ・・・」

ホワイト「どうです？嫌な事をどんどん忘れていくでしょう？」

マドンナ「甘えていいわよ。もう、仲間なんだから。うふふふ」

ヴィンス「・・・沙羅・・・」

泣きながらマドンナの胸に顔をうずめるヴィンス。  
高らかに笑うマドンナとホワイト。  
そこにランドが駆け込んでくる。

ランド「貴様ら、何やってんだ！？・・・おい、ヴィンス！しつかりしろ！  
ヴィンス！お前たち、ヴィンスに何を」

ホワイト「おいおい、商売の邪魔すんじゃないよ」

ランド「商売だと！？ふざけるな！」

マドンナ「もう、これからいいとこののに。こいつみたいにマジメな奴は  
さ、薬に依存しやすいからいいお客さんなのよ。これからはこれが無くち  
や生きていけなくなる。そうしたら死ぬまでずっと薬を買ってくれるじや  
ない？」

ホワイト「そういうわけだ。あんただって言ってただろう？真面目だけが  
取り柄の、つまらない田舎町だって」

ランド「言ったがこんなことをさせるためじゃ」

ホワイト「いいじゃねえか、他人のことなんてどうだって。虫唾が走るん  
だよ、誰かが誰かのために何かしようなんて言うインチキはよ。誰だって  
自分が可愛いだろ？他のやつのことなんて本気で心配してやしねえよ」

ランド「うるせえ。俺たちはお前らとは違う。誰が何と言おうと、こいつ  
は俺の一番の友達だ。これ以上、この街に手を出すな。今夜のうちに出て  
いけ。次会ったら・・・殺すぞ」

ホワイト「殺すだと？ふつ、ふあはははは！こりゃいい、馬や牛のクソに  
まみれた田舎もんが、このホワイトさまを殺すだと！？はっははは・・・  
やれるもんならやってみる！」

ナイフを取り出すホワイト。

ランド「このやろう！」

喧嘩が始まる。

腹を刺されるランド。

ランド「てめえ・・・ぐうっ・・・」

ホワイト「・・・チッ！行くぞ」

逃げていくホワイトたち。

ランド「ちつくしよう・・・痛ててて・・・あう・・・ほら、しっかりとしろ、ヴィンス！帰るぞ」  
ヴィンスを連れて帰るランド。

#### ◆馬小屋。夜。

死んだように月を見ている花恋。  
そこにマザーが来る。

マザー「ここだったのね」

花恋「マザー・・・」

マザー「風邪ひくわ。中に入りましょう」

花恋「・・・ニューヘイブンに行つてすぐ、どういうわけか私は大きな舞台上に抜擢されて、一時は夢がかなったの、ミュージカルスターになれたって有頂天だったわ・・・沙羅にも公演の写真を送ったらすごく喜んでくれた・・・かわりに届いたのがこの写真」

マザー「・・・ジョシユア？」

花恋「ええ・・・沙羅はジョシユアを生んで、一人で育てようとしたたでしよ・・・しかも、ジョシユアにはハンデがあるって聞いて、いつでも力を貸そうって思ってたの・・・だけど・・・」

マザー「だけど、何？」

花恋「私が抜擢されたのは一瞬だった。プロデューサーに体を求められ、拒否した途端、舞台を降ろされたわ・・・必死にしがみつこうとしたけど、駄目だった・・・私には才能も力もないことを思い知った・・・ニューヘイブンを出て、この先どうしようかって考えながら、いろんな町の小さなショーを渡り歩いたわ・・・そして、本当の本当にステージを下りようと決心したそんな時、あの男に出会ったのよ・・・」

マザー「昼間の男ね」

花恋「(うなずき) あいつは私をスターにしてくれたわ。ヌードダンサーとしてね、ふふっ・・・沙羅、がっかりするだろうな・・・こんな私に」  
マザー「そんなことないわよ。今あなたが、どんなあなただろうと、沙羅は受け入れるわ。だって沙羅とあなたは、本当の友達なもの。それを忘れては駄目よ。絶対に」

花恋「マザー・・・」

マザー「おかえりなさい、沙羅の家に。そしてすべて、本当のことを言うの。つらかったことも、苦しかったことも全部。いい？」

花恋「・・・言えない・・・もう、沙羅に会うことは出来ない・・・」

マザー「何故？沙羅はきつと」

花恋「無理よ！・・・私、取り返しをつかないことをしてしまった・・・」

マザー「花恋・・・」

◆同じ月の下

部屋の窓から同じ月を見ている沙羅。

M 『同じ月の下』

マザーと花恋が馬小屋の外で同じ月を見ている。

ヴィンスとランドも牧場への帰り道、同じ月を見ている。

沙羅の隣に来てフルートを吹くジョシュア。

沙羅「ジョシュア・・・母さん、あなたに話しておきたいことがあるの」

ジョシュア「なあに？母さん。僕に話しておきたい事って」

沙羅「あなたはね、本当は母さんの子供ではないの」

ジョシュア「そうなの？じゃあ、僕は誰の子供なの？」

沙羅「分からないわ。10年前の雪の日、あなたは教会のドアの前に置き去りにされていた。小さな籠の中、真っ赤な毛布にくるまって、私が見つけた時、あなたが笑ったの。どうしてか、私はあなたのことがあつという間に大好きになっちゃって、ずっと一緒にいようって勝手に決めちゃったの。マザーには止められたけど、私の気持ちは変わらなかった。だけど、いつかあなたにも本当のことを言わなくちゃいけないって思ってた」

ジョシュア「どうして今話すの？」

沙羅「今話さないと、一緒にいられなくなりそうで怖いの」

ジョシュア「どうして？どうして一緒にいられなくなるの？何が怖いなの？」

沙羅「分からない。母さんにも分からないけど、本当のことを知っても一緒にいられるなら、きつと、どんなことがあってもずっと一緒にいられるでしょ？母さん、ジョシュアが大好きなの」

ジョシュア「僕も母さんが好きだよ」

沙羅「ごめんね、ジョシュア。こんな母さんだけど、これからも一緒にいてくれる？」

ジョシュア「一緒にいるよ。僕は母さんを守らなきゃいけないから。僕は男だからね」

沙羅「ありがとう、ジョシュア」

ジョシュア「うん。ねえ、母さん。お月さま、綺麗だね」

沙羅「そうね」

#### ◆教会の地下室

禁断症状に苦しむ花恋。

蝶の刺青を必死に消そうとする花恋。

マザー、イヴァナ、チャバツクの3人がかりで花恋を押さえつける。

花恋「いやー！お願い、薬をちょうだい！助けて……お願い……薬を……」  
マザー「花恋！薬は無いわ！沙羅に会うために薬を抜くんでしょ！？そう誓ったんでしょ！？」

花恋「だって、だって……いやー！殺して！……苦しい……マザー、お願いよ、もう殺して……生きてたってしようがない……もう十分よ……殺してー！」

マザー「負けちゃだめ！花恋！私がついてる！一緒にこの試練を乗り越えましょう！私を見て！花恋！花恋！……可哀そうに……必ず私が守ってあげる、大丈夫よ、がんばりましょうね……」

花恋「マザー……苦しいの……沙羅……沙羅……」

苦しみ続ける花恋。

#### ◆沙羅の家

カードもチェスもしないジョシユアと空琉とストロベリー。

空琉「なんで歌の練習しないんだろう？」

ストロベリー「マザーがいいって言うまで、教会に行っちゃいけないんだって」

空琉「クリスマスが来ちゃうよ！コンサートやらないのかな……」

ストロベリー「知らない。せつかく、踊れると思ったのになあ」

ヴィンスとランドが来る。

ランド「よう、ガキども、しけた面してるなあ」

空琉「なんだ、ランドさんか」

ランド「なんだはないだろ？せつかく遊んでやろうと思って来たのによ」  
空琉「本当？じゃあ、何して遊ぶ？」

ストロベリー「私はいいわ、ランドさんと遊ぶと服が汚れるから」

ランド「馬鹿だなストロベリー、服なんて洗えばいいだけだろ？ほらほら、外へ行こうぜ。かくれんぼか？それとも木にでも登るか？あいたたたたた……」

空琉「どうしたの？」

ストロベリー「お腹痛いの？」

ランド「いや、なんでもねえよ、あはははは・・・」

ジョシユア「ヴェンスさん」

ヴェンス「・・・なんだい？ジョシユア」

ジョシユア「ヴェンスさんは母さんのこと好き？」

ヴェンス「・・・ああ、好きだよ・・・」

ジョシユア「じゃあ、僕のこと？」

ヴェンス「・・・好きだよ、もちろん」

ジョシユア「でもそれは、僕が母さんの子供だからでしょ？」

ヴェンス「え？・・・」

ランド「どうした？ジョシユア。何かあったのか？」

ジョシユア「あのね、僕ね、母さんの本当の子供じゃないんだ」

ヴェンス「・・・何言ってるだ、ジョシユア？」

ランド「おいおい」

ジョシユア「だから、僕のことを無理に好きにならなくてもいいんだよ。

僕と母さんは血が繋がってないの。そろそろつながってるような気もするけど、多分だめなんだ」

ストロベリー「ジョシユア・・・」

ジョシユア「僕が母さんを守ってあげたいんだけど、僕、病気があるでしょ？だから、もし僕がいなくなったら、ヴェンスさんに母さんを守ってほしいの。僕は、ヴェンスさん、すごく好きだから」

ヴェンス「・・・」

駆け寄りジョシユアを抱きしめるヴェンス。

ジョシユア「・・・ヴェンスさん？」

ヴェンス「何言ってる・・・ジョシユアが、沙羅も俺も守ってくれよ。お前が一番強いんだから。な、頼んだぞ」

ジョシユア「・・・うん、いいよ」

#### ◆教会の地下室

静かに眠っている花恋。

沙羅が入ってくる。

イヴァナ「沙羅・・・」

沙羅「……………」

マザー「…………頑張ったわよ、花恋」

泣き出す沙羅。

花恋が目を覚ます。

チャバック「あ、マザー」

マザー「目が覚めたわね」

花恋「…………沙羅」

沙羅「……………」

M 『I Can't Stop To Love You』

#### ◆教会 クリスマスコンサート

クリスマスイブ。街の人たちが礼拝堂に集まり、賑やいでいる。

音々「さあ、みなさん、いかがですか？素敵なクリスマスイブ、過ごしてる！？」

みんなの歓声。

音々「それじゃ、今日のメインイベント、クリスマスコンサートをスタートしたいと思います！準備はいい！？」

朝子「ちやっと待って待って！その前にちよつとだけしゃべらせて！」

音々「何よ、朝子さん！？勝手に進行変えないでよ」

朝子「ちよつとくらいいいじゃない！えー、みなさん、モーニングベーカリーの朝子です！」

ランド「みんな知ってるよー！」

朝子「うるさい、ランド！」

みんな「(笑)」

朝子「恒例のチャリティーバザーですが、私たち婦人部で一生懸命作った小物達、ちよつと売れ行きがイマイチなので、コンサート終了後、即売会を行いますので皆さん、必ず買って帰ってよね！」

みんな「(笑)」

音々「まったく、客脅してどうすんのよ、ねえ？」

みんな「(笑)」  
音々「それではお待たせいたしました！今度こそ本当に、クリスマスコンサート」  
みんな「スタート！」

M 『サンタが街にやってくる』

大盛り上がりのクリスマスコンサート。

◆再出発

クリスマスの朝。旅立つ花恋。

花恋「じゃあね、沙羅」

沙羅「行くんだね。やっぱり」

花恋「うん。行く。今このまま、ここで沙羅たちに甘えたら、もうきつと、二度と自分の足で歩けなくなりそうだから。しつかり、もう一度、やり直してみるよ」

沙羅「わかった。信じてる。花恋なら大丈夫。だって、私の一番の友達だもん」

マザーが来る。

マザー「必ず帰ってきて。約束して。いい？」

花恋「わかったわ。マザー」

M 命のロウソク

みんなが見送りに来る。

旅立っていく花恋。

いつまでも手を振る子供達。

おしまい